

新 知 故 温

古きをたずねて新しきを知る

「日本サッカーの 大きな忘れ物」

平木隆三

新 連 載

(JFA news
No.70 1990年より)

以前のJFA news等には、現在にも通じ、貴重な教えとなる記事が多数あります。そのような記事を紹介し、現在の状況や取り組みをあらためて考えていきたいと思えます。



平木隆三氏 © Jリーグフォト

漢 和辞典に「基本」とは、物事のよりどころとなるもと、もとい、基礎と記されている。そして「基礎」とは、いしづえ、土台、建物の土台、物事のもとい、根底、とも記されている。

日本サッカーは、多くの関係者の努力で量的には素晴らしい発展を遂げながら、トップ層での活躍は必ずしも満足のゆく結果が得られず、メキシコ・オリンピック以来ミュンヘン、モントリオール、モスクワ、ロサンゼルス、ソウルと5回のオリンピック(延べ20年)出場を閉ざされ、ワールドカップにおいてははまだ本大会出場は夢は果たされておられません。

その原因を探るとき、その時々には種々な要因が取りざたされ、それはそれなりに正しくとらえられており間違いはないと思っている。

しかし今回バルセロナ・オリンピック候補選手の西ドイツでの強化合宿をクラマーさんに指導を頂き、2回のクラマーさんの来日で指導を受けた状況を踏まえ改めて考えさせられたことは、冒頭述べた「基本」に立ち返って考え直す必要があるということであり、「基本」の大切さを見失ってはならないということである。クラマーさんの言葉を引用させて頂くと「日本サッカーは1960年代に戻っている」と言い、「選手は色々できるようだが、すべて中途半端—50%」と厳しい。そしてまた「動きながらスピードを伴ってまたは相手のプレッシャーのなかでのボール扱いは正確さに欠ける」とこれまた厳しい評価となっている。

確かにプレーの正確さを重点に選手のプレーを改めて見直しをしてみると、クラマーさんに反論できないのが事実である。

決して全然できないとは言わないが、コンスタントに正確なプレーが、となると上記の結果と言わざるを得ない。

それではここでクラマーさんの指摘の言葉を借りながら指導者・選手が「基本」に対する認識とその大切さを理解して日ごろのトレーニングに励んで頂きたいと思う。

サッカーには守備と攻撃。この二つの局面しかない

この二つの局面の交錯するゲームのなかで、二つの義務を果たすこ

とのできる選手を育成することが指導者の責務であり、加えてその切り替え時において常に休みが入るようでは戦力として評価出来る選手でない。ひどい選手のなかには片側の仕事にしか興味を示さないものがあり、クラマーさんはあきれかえっていた。しかし指導者のなかにはそれを了として人にもいるやに聞くとちょっとクラマーさんには説明の仕様が無い。

選手がこのような基本的な考えかたに理解を示さないならば、その間違いを指摘し指導することは当然のことといえよう。

「ルック・ビフォア」「シンク・ビフォア」

常に、事前に周りをよく見て、次に何が起こりそうなのか予測し、なすべき自分のプレーを考えておく習慣を身につけなければならない。

このような習慣のない選手は、常にプレー面で相手より後手を踏み劣勢を余儀なくされる結果となる。サッカー選手には欠かせない資質であることを肝にめいじて指導に当たってほしい。

パスを受けるための動き

パスを受けるためには、相手の虚をつき(逆をとる動き)相手より有利にパスを受ける必要がある。いつまでも相手のマークにしばられてパスを受けようとする選手は、パスを出そうとする味方にとっては迷惑至極、パスの出しようがない。ボールを持っている選手にたいして、いつどこでパスを受けたいのか、タイミングとコースを計算してのパスを受けるための動きが大切である。

特にこの悪習慣は、多くの選手にしみついており、こんな「基本」を見過しているようでは、なにを指導しているのか疑いたいとクラマーさんは言う。

恐らく、この悪習慣は練習時または練習前に選手たちがよくやっている4対2、5対3のボール回しに起因しているものと思う。やるならもっと真面目にやってほしい。さもなければ、このようなボール回しは禁止したほ

うがよい。

「ボールを待つな」「ボールに寄れ」

これらの事柄は当然のこととはいえ、これもまた残念ながら選手たちはルーズになっている。常に自分をマークする相手がいることは当然であり、日本の試合では、マークのルーズさがこの必要性を理解させないでいる。一度失ったボールを取り返すことの大変さは言うまでもなく、下手すると相手に得点の機会を与えることになりかねない。

「正確なプレー」「ボールを弾ませるな」

ワンタッチ・コントロール—正確なボールコントロール、ボールをいつまでも弾ませるな。ボールを弾ませているあいだに、最低5メートル離れている相手選手がボールを奪いにくくすることはだれにでも容易に理解できるはずだ。いかなるボールもワンタッチ・コントロールを心掛け、そしてまたパスかドリブルか正しい判断に基づいた正確なプレーはサッカーの質を決める。

次の状況を予測したボールの止め方。そしてパスの場合、パスを受ける選手になにを期待するのかパスの質を求められ、単に味方にボールが渡されたのではパスの意味がなく厳しく言えば正確なプレーとは言い難い。

パスした後の動き

パスの後、すべての仕事を終えたごとく立ち止まっている悪習慣が身についてしまっている選手が多いのにクラマーさんは手を焼いていた。

自分がパスした意味そして次にどのような状況を考えているのかを問われているわけで、その場に突っ立っていいわけがない。

これまた、ボール回しの悪習慣と言わざるをえない。

フォロー

サッカーのグループ戦術とは何か。常に局面において数的優位を作ることであり、味方を孤立させないことにつぎる。局面でのプラス・1、プラス・2は人数の多さより、より多くの可能性をもたらすことは、だれにでも考えられる数の理論である。

動きのバランス

味方をサポートする動きは、みんなが同じ動きをしたのでは意味がない。飛び出す選手、戻る選手、近付く選手、離れる選手、と言ったように動きのバランスを考慮することが大切。そして一直線上に何人いたとしてもパスのコースは一つしかない。守っている側にとってこんな守りやすいことはない。

攻撃時には、攻撃の可能性を一つでも多くすることが大事であることは言うまでもないことだ。

チョップ・チョップ・アザーサイド

前述のように、ある局面でチョップ・チョップと短いパスをつなぎ相手



Detmar Cramer © AGC/AIFNews

の選手を引きつけて、次の瞬間逆サイド(アザーサイド)へ展開し、そこを突破口として得点の可能性を高めるといったことがチームの戦術として用いられるのが常であり、しかし残念ながら日本のサッカーでは知らず知らずのうちに多くの選手がボールサイドに意識が偏るばかりでなく、選手まではボールサイドに偏った動きとなり攻撃の幅を狭め68メートルの幅を活用できず、自ら苦しい状況に陥ってしまっている。時には片側30メートル双方の選手のない空白地帯となっていることが再三見られ、クラマーさんの指摘はもっともだということになるわけだ。

そしてここでも技術の正確性についておしかりを受ける。せっかくのセンターリングのチャンスにミスが目立つ。もちろん味方選手のゴール前の詰めの悪さが一因でもあるが、ただ漠然とけているようにしかクラマーさんの目にうつらないのだろう。

スタッフェルン

ゴール前の詰めの甘さは得点の可能性をますます悪くしている。

①ニアポスト②ファーポスト③下がり気味、と常に最低三つのコースを確保することが肝要で、ゴール前で4人5人と詰めたとしても団子になっては意味がない。

自分が点を取るのの意気込みよろしく、みんな同じところに立てては能率がわるい。スタッフェルンとはドイツ語で段階状にの意図があり、多くの可能性をもたらす詰めのシステムを言っている。

もっとも、残念ながら多くの日本の試合ではゴール前に詰めている選手が1人、多くとも2人とクラマーさんは手厳しい。

以上攻撃についてクラマーさんの感想を中心に「基本」について述べてきたが、簡単にいってしまえば、日本のサッカーは「基本」を軽視している。悪い習慣をそのままにしているのが現状を招いたということになるのではないかと。

次に守備に関して拾ってみよう。

マークの原則

ゾーンもマンツーマンも関係ない。いずれにしても刻々と変化する戦況のなかで当面自分が捕まえるべき相手選手に対して、正しいマークのポジションをとり、相手からボールを奪い返す狙いをどれだけ忠実にこなされているか選手の動きを追って見てほしい。

ボールのみに気を奪われ決定的に相手をフリーにし苦しい戦いを強いられたのでは勝ちみはない。

殊にゴール前、みんなでおれば怖くないといった気持ちでたむろし、数少ない相手に点をとられている様子は嘆かわしい。

1人1人が的確に相手をとらえ(マーク)、積極的にボールを奪いに行く習慣が身につかない限り、いい守備は保証されない。

ファウルはするな

マークがルーズになると、最終的に相手との戦いは条件が悪くなる。従ってつい手を使ってファウルを取られる状況が増えてきている。

今日、リスタートから得点をあげるケースが多いだけに、あえて相手にチャンスを与えるがごときファウルは絶対にやめるべきであり、改めて「基本」に帰って「いいポジションから相手に対応する」といった習慣を身につけるべく指導者の努力が必要で、加えて“そのプレーはファウルである”として審判諸氏の協力も必要になってくる。

今回西独遠征した選手たちは、いとも簡単にファウルを取られるのに驚いていたのはこっけいとしかしいようがない。

1対1に負けるな

サッカーの試合は、1対1の戦いの積み重ねであることは万人承知の事実である。

一般的に、1試合に1対1の戦いは250~300回あり、その戦いに60%負ければ勝ちみはないとクラマーさんはいう。

殊に1対1の守備に関していうならば、オリンピック候補選手の能力は低いと評価せざるを得ない。

1対1の守備を考える時、前述のポジションングの問題から言及しなければならぬが、例えばいいポジションングをしていながらも時としてあまりにも消極的で、相手を自由にさせていたり、また反対に“やみくも”につつかるといった辛抱のない身勝手な悪癖がある。1対1の局面不利と考えたとき味方のカバーとあわせて息の合った守備を行うアイデアに乏しい。このように、1対1の間合いと、アタックの問題は確かに簡単ではない。相手の特徴(足が速いタイプ、テクニシャン等)、地域(中盤か終盤か等)、味方の体制(数的有利、不利等)等の多くのファクターを計算に入れながら、自分の間合にはめ込みボールを奪い取るテクニックを覚える必要がある。時として相手にフェイントをかけながら積極的にボールを取ることも出来るだろう。相手の前に立っているだけでは守備にならない。平素の練習のなかで積極的にトライ・アンド・エラーを繰り返し覚えて欲しい。

カバーリング

すべての守備の状況で、マークとカバーは堅固な守備を形成するのに欠かせない守備の原則である。

カバーリングは、守備に厚みをもたらす重要なファクターであるが、カバーリングの位置については慎重でなければならない。1対1を破られてその次の瞬間相手をつぶせるカバーリングの間隔は自然にきまってくる。その間隔があまりにも開いては全く意味がない。

1対1のチャレンジがない。カバーリングが離れすぎているのでは全く守備がないと極言されても仕方ない。

相手のミスでしかボールがとれないのでは戦いにはならない。

つるべの動き

“マークとカバーの動き”を称して“つるべの動き”と言うことになる。

ボールサイドは対人マーク、逆サイドは地域のカバーという守備の形を、ボールの動きにつれて繰り返し行うことで、相手の突破を許さない堅固な守備を作ることになる。

一般的には守備のバランスと言う表現を使っているが、守備ラインのウィークポイントである守備ラインの背後にたいする事前の対応を常に心掛ける必要がある。

クラマーさんは、守備ラインを見ているだけですべての戦況を理解することが出来るというおられる。ここまで整備されれば万全の守備と言うことになるわけだ。

以上、クラマーさんの指摘を拾いながらいかに「基本」が大切であるかを理解していただきたくて書いてみた。

古い機関誌をお持ちの方はクラマーさんが最初に日本に来られたころの記録をお読みになると、恐らく同じことを言っているということになると思う。

「基本」は時代によって変わるものでない。クラマーさんが、余りにも「基本」を軽視している日本サッカーにたいしてもう一度「基本」からやり直せと厳しいおしかりであるわけだ。

このような「基本」は、ついでにきているものとして、その時々厳しくアドバイスすることをためらってはいまさしく砂上の楼閣と言うことになる。

南米遠征をして帰ってきた横山監督は“ブラジル代表と対戦して関心したことはやるべきこと「基本」を事もなげにやりおしていることであり、特に難しいことをやっているとは思えない。改めて「ボールを待たない」「パスしたあと必ず動く」といった「基本」を忠実に実行し、そしてその間にあるすべてのプレーが正確であることの重要性を教えられた。これに尽きる”と語っていた。

一方、西独に遠征してきた我々がクラマーさんに厳しく指導された事柄と全く一致していたわけだ。

選手にとって、「基本」に関してその都度指摘をされることは、つらいことかもしれないが、「基本」ができていないということは、戦いに通用しないということであるという意味を理解させなければ決して発展はありえない。

クラマーさんは、残念ながら日本国内の試合であればそのままでも通用することかもしれないが、その試合がいかにレベルが低いかということであって、決して国際レベルでは通用しないばかりか絶対に国際レベルで評価される成果は期待できないという。

今日を限りに、我々指導者が「基本」を思い返して、選手が肌で理解するまで追及の手を緩めてはならない。

確かに、最初のうちはあれもこれも練習の能率が悪いと思うが、許してはならないことは許してはならないので、根気よく指導する必要がある。

指導とは根気である。本当の愛情をもって指導し日本サッカーを世界のひのき舞台に押し上げて頂きたい。

指導者の健闘を期待いたします。